専門学校の教育の質保証を目指して

職業人として獲得した知識や経験をどう学生に伝えるか

専門学校では、仕事で必要とされる専門的な知識や技能を、その業界で現役で活躍している方が非常勤講師として指導する授業が多くあり、そうした授業の質を高めていくことが、学校全体の教育の質保証や向上において重要な位置を占めます。そこで、山口県に拠点を持つ専門学校 YIC グループの理事と非常勤講師を務めるお二人の先生、そして、専門技能の伝承について研究する京都大学の塩瀬隆之准教授にお集まりいただき、今回の調査結果や、講師の先生方が学生の現状に対して日々実践されている指導の共有を通して、専門学校が教育の質を向上させるためにできることは何かを語り合っていただきました。

座談会参加者

YIC
ビジネスアート専門学校
パティシエ学科
非常勤講師

井本照美

いもと・てるみ　レストランのパティシエとして勤務しながら、非常勤講師として、製菓実習の授業を週２日受け持つ。講師歴は６年目。

YIC
キャリアデザイン専門学校
デザイン科
非常勤講師

齊藤寛和

さいとう・ひろかず　ウェブ制作会社に勤務後、2013 年に独立し、ウェブクリエイターとしてフリーで活躍中。週１日、ウェブデザインの授業を受け持つ。講師歴は５年目。

専門学校
YICグループ
理事・
統括本部長

岡村慎一

おかむら・しんいち　東京の予備校に勤務後、2004 年から同グループの講師を経て、教務、広報、就職、事務主任を歴任。全国の専門学校教職員、キャリアコンサルタントの育成も行う。

京都大学
准教授

塩瀬隆之

しおせ・たかゆき　京都大学大学院工学研究科博士前期課程修了。博士（工学）。京都大学情報学研究科助教などを経て、2012 年７月から２年間、経済産業省産業技術政策課技術戦略担当の課長補佐に従事。2014 年７月から現職。小・中学校や高校におけるキャリア教育、企業におけるイノベーター育成研修など講演多数。

専門学校 YIC グループ

山口県に専門学校７校、京都府に専門学校３校と日本語学院１校を擁する専門学校グループ。1990 年、山口県宇部市に現 YIC ビジネスアート専門学校を開校以降、地域に貢献する教育機関として１万人を超える卒業生を輩出した。グッドキャリア企業アワード 2016 大賞（厚生労働大臣表彰）受賞。

課題整理

職業人としてしっかり育てたい、でも、学生は多様というジレンマ

学生の多様性をめぐる課題①

技能を学ぶための基礎が十分でない学生への対応に苦心

――最初に、非常勤講師のお二人の先生の、普段のお仕事とＹＩＣで担当されている授業について教えてください。

井本　私は、地元のレストランにパティシエとして勤めており、パティシエ学科では週２回、１日かけて行われる製菓実習を指導しています。

齊藤　私は、デザイン科の２年生がウェブ制作を学ぶ３時間の授業を週１回担当しています。仕事はフリーのウェブデザイナーで、ウェブ制作会社に勤務後、独立しました。本校の非常勤講師になって５年目になります。

――お二人は指導をする中で、今の学生をどのように捉えていますか。

井本　今の学生は、意識も能力も多様で、どこに合わせて指導すればよいのか難しさを感じています。例えば、実習の時に、「この材料を４分の１にしてください」と言うと「４分の１はどれくらいですか」と聞いてきたり、「この生地を70㎝に伸ばしてください」と指示したら、30㎝物差しの「70」のメモリを見て７㎝の長さに伸ばしたりする学生がいました。そうした学生はごく少数なので授業を先に進めますが、授業の中でどう個別に支援すればよいのか考えてしまいます。ご紹介いただいたデータの中で、「学ばなければならない内容が難しい」に約６割の学生が肯定的な回答をしていましたが（**図１**）、専門知識を学ぶための基礎知識が不足していると感じます。

齊藤　私も同じ思いです。ウェブ制作にはＨＴＭＬタグという専門用語を使いますが、その基になっている英単語を知らない学生が多く、単語の綴りと意味から教えています。また、学生が日常的に使うのはスマートフォンなので、キーボードでの入力に慣れておらず、さらに漢字の読み方が分からず入力に手間取るようです。決して能力が低いわけではないのですが、タイピングの遅さに劣等感を抱き、学習意欲を失う学生がいるので、一人ひとりに応じた指導の必要性を感じています。

学生の多様性をめぐる課題②

必ずしも目指す職業として学んでいない学生たち

井本　意欲の面でも課題を感じることがあります。パティシエを職業として目指すなら技術の習得が最も大切で、私はよく「ゴムベラと友だちになりましょう」と伝えています。例えば、ボウルに入った材料をゴムベラできれいに取れば、材料を無駄にせず、その後の洗い物も楽にできます。しかし、ボウルに材料が残っていても、気にせずに洗ってしまう学生もいます。毎回の実習でそうした基本技術をおろそかにせず練習し、体で覚えることが自身の技術上達につながるのに、「周りと同じだから大丈夫」と思うようです。

岡村　専門技能の習得を目標とした専門学校でも、学生の意識はまちまちなのが現状で、経済や学力の面から、専門学校にしたという学生もいます。

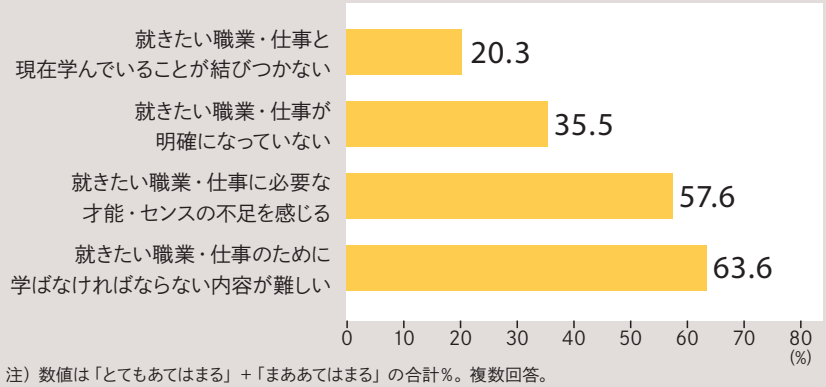
塩瀬　伝統工芸や機械工業の技術者といった徒弟制度のある専門職では、最初にかなり厳しく指導し、本当に意欲のある者以外をふるい落としていきます。しかし、専門学校では、学生全員が目標に到達するよう支援しなければならず、そこが先生方が苦労されるところですね。

井本　私は、学習意欲が感じられない学生には、自分の将来像について聞くようにしています。「お菓子作りが好き」程度の学生に、「職業にするのだから」と厳しく指導しても、学習に否定的になるだけなので、その学生の将来像に応じた指導をしています。

齊藤　私の授業でも、学生の意識は多様です。デザイナーになりたいという目標が明確な学生は、就職後のことも調べ、デザイン会社では労働時間が長いなどといった厳しい現状も知っており、仕事に対して覚悟ができています。ですから、教える方も「これくらいはできないと就職後についていけない」

図１　進学後の学びや進路に関する悩み

Q. 専門学校での学びや進路に関する悩みについてお聞きします。次のようなことはどれくらいあてはまりますか。



注）数値は「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の合計％。複数回答。
出典／ベネッセ教育総合研究所（2017）「専門学校生の学習と生活に関する実態調査」

という姿勢で指導できます。ただ、デザイン学科には「グラフィックデザイン」「ＣＧ・ＷＥＢデザイン」「イラスト・マンガ」の３つの専攻があり、私の授業はそのすべての学生が受講しているので、学習意欲は多様です。

その職業に就くのだからといって
どこまで厳しく指導すべきか。
意欲を失わせずに、
指導する難しさを感じています。

井本

指導上の課題①

資格取得と職能教育のバランスをどう図るか

――目的意識が高くない学生に、どのようなスタンスで指導されていますか。

齊藤　ウェブデザイナーにならなくても、ウェブが何に活用できるのか、自身の就職後にウェブがどのように生かせるのかという視点で学べると思います。目標は、「仕事に使える技能を習得する」です。そこで、どのレベルの学生でも一定の成果が得られるよう、専任講師と相談をして、就職に役立つウエブ制作に関連した資格の取得を目標の１つにしました。座学もある程度必要になり、実践的な技能の重視とは矛盾しますが、すべての学生に達成感を味わわせることで、ウェブ制作への関心を高めたいと考えています。

井本　パティシエ学科でも、１年前に製菓衛生師の資格を取得できるカリキュラムになりました。ただ、その資格がなくてもパティシエとして就職できるので、私としては、資格対策を行う時間や労力を実習に充てて、製菓技術をもっと向上させた方が就職後に役立つのにと思ってしまいます。

岡村　井本先生の指摘は、確かにその通りだと思います。ただ、資格を取得させれば就職は安心といった保護者の思いは強く、そのニーズを無視できないという現実があります。

塩瀬　資格取得と職能教育のバランスは、私立であれば大学も専門学校も共通して抱えている課題です。

齊藤　ＩＴ関係には様々な資格がありますが、私は基本情報技術者の資格しか持っていません。情報技術の進歩は速く、３、４年も経てば、状況は全く変わっています。自ら知識や技術を更新していかなければ、資格だけを持っていてもあまり意味がないのです。

岡村　お二人の話を聞くと、就職に資格が必須である職業とそうでない職業との違いを、学生や保護者に周知することも、教育の質向上に必要だと痛感します。

指導上の課題②

自分が仕事として学んだことを学生に教えるだけでよいか？

――そうした課題がありつつ、お二人はどのように授業づくりをしていますか。

井本　私は、専任講師の方針に沿うよう、授業前に指導内容を確認しています。美味しさは人それぞれで、ショートケーキ一つとっても作り方は多様で、正解はありません。ただ、先生によって作り方が異なると学生は戸惑ってしまうので、専任講師と相談して指導を合わせています。学生から作り方の違いを指摘された時は、その方法にした理由を説明し、やり方が１つではないことを伝えています。

齊藤　ウェブ制作の授業を担当するのは私だけなので、専任講師からはすべて任せられています。先輩の先生方に相談してアドバイスをいただくこともありますが、基本的に、私が雇いたいと思うような人材を育てることを目標にして、自分で授業構成を決め、教材も作っています。

――指導で課題だと感じていることはありますか。

齊藤　指導法の専門的な技能を学んできたわけではないので、自分が仕事として学んできたことを、学生が使えるようにどう伝えるかについては、日々悩んでいます。例えば、学生のレベルにばらつきがある場合、できる学生もそうではない学生もそれぞれ力をつけるためにはどうすればよいのかといったことに課題を感じています。私の授業は週１回なので、普段の学生の様子を共有できる場があれば、もっと課題に応じた指導ができると思います。

井本　私の場合は、齊藤先生とは逆で、実習で学生と１日中向き合っているので、その様子をよくつかめますし、学生の保護者の年齢に近い私は、ほかの先生より話がしやすいようです。甘えられることも多く、どこまで対応すればよいのか線引きが難しいと感じています。また、教える立場としては、「駄目だ」「もうできない」という学生にも、時間がかかってもよいから最後までやり遂げるよう指導しています。

岡村　指導経験の少ない非常勤講師の先生方のご苦労は十分認識していますが、地方では専門的な職業であればあるほど、それに従事している人は少なく、特に業界の最先端を指導してくれる非常勤講師を引き受けてくれる人材を探すのは大変です。そのため、採用時点で高い専門性に加え、指導力まで求めるのは、厳しいのが現状です。ただ、先生方の指導力向上は、教育の質保証において中核となる重要な課題であり、学校として力を入れるべき取り組みだと捉えています。

教育の質向上への取り組み

学校全体でのノウハウの蓄積が効率的・効果的な指導に結びつく

講師個々の指導力向上策①

課題を正しく把握するためまずはデータの蓄積を

――これまでのお話を踏まえて、専門学校の教育の質向上には何が必要だと思われますか。

塩瀬　まず、教育上と運営上の課題を整理することが大切です。意欲も能力もある学生に対して職能教育を充実させることと、運営上、そうでない学生を支援する際の課題を、同じように解決できません。さらに、日本では、学校教育に専門的な知識・技能の指導だけでなく、人間的な成長への支援を求める傾向があります。しかし、専門学校の先生は、小・中学校や高校の教員のように体系的に指導法を学んでいないので、学校として組織的に指導力向上を支援すべきでしょう。同じように教育者としての資格の必要のない大学では、ＦＤが盛んに行われています。

――具体的にどういった対応が考えられるでしょうか。

塩瀬　学生の授業中の様子や先生方の指導の工夫を吸い上げて、講師間で共有する仕組みをまず作ることでしょう。例えば、技能を習得できない要因もひとくくりにはできず、基礎学力が足りないのか、意欲が低いのかなどによって対応が異なります。要因に応じた支援をするためにも、課題の共有は必要であり、その課題に対してどう対応したのか記録すれば、指導のノウハウとして蓄積されていきます。非常勤講師にも記録をお願いすれば、週１回でも１年間で40項目はたまります。

岡村　少しずつでも積み上げていけば、大きなデータベースになりますね。専門学校では非常勤講師も多く、学科混在の職員室であることが多いので、そういった情報共有の場が必要です。

塩瀬　基礎学力不足であれば、学科を超えた共通項を洗い出し、まとめて指導することもできます。ただ、教科の学び直しが目的ではないので、パティシエに必要な算数、ウェブデザイナーに必要な国語や英語の内容を洗い出すことが大切です。それらに絞れば授業に直結することを学べるので、学生も目的意識を持ちやすいと思います。

齊藤　最近の学生は、私が教室にいても分からないことを自分でインターネットで調べてしまうので、課題をつかむのが難しいと感じています。

岡村　直接話すのが苦手な学生もいるからと、授業中、チャットで質問を受ける先生がいました。また、ミニッツペーパーやリフレクションカードのように、毎回、学生に授業の振り返りをしてもらい、学生の悩みを吸い上げる方法もあります。一言でもコメントを添えて学生に戻すことで、学習意欲につながるという効果も期待できます。

講師個々の指導力向上策②

ティップスを学校全体で共有するための体制を築く

――貴校では、講師対象の研修はされていますか。

岡村　本校では、夏季と冬季の休業期間中に各４日間、研修を行っています。内容は教授法やクラス運営、特別支援など約15講座で、常勤・非常勤のすべての先生が無料で参加できます。

塩瀬　通常の授業で課題を集めておき、その課題解決を図れるような内容にすれば、先生方にとって実践的な研修になりますね。

岡村　ほかにも、一定の規模の学校である強みを生かして、心理相談担当者を常勤で置き、授業で学習支援が必要な学生には専門の担当者が支援に入ることを始めました。そうしたノウハウを蓄積し、先生方に提供できるようにしていきたいと考えています。

齊藤　そうしたデータベースがあるといいですね。私の場合、学校に行くのは週１日なので、口頭だけでは情報を伝えにくいと思います。

塩瀬　指導のノウハウは科目が異なっても共通する部分があるので、学校全体で共有することに意味があります。例えば、ペアワークの導入です。実力差のある学生をペアにして、一つの課題制作に取り組ませます。できる学生が教える役になり、教えることで理解が深まり、できない学生も理解できるようになるという手法です。

齊藤　実は、授業でペアワークを取り入れたことがあります。就職すれば知識や技能の異なる者同士で仕事をするので、そうした場面を経験させようと思ったからです。ただ、その時にはできる学生が一人で先に進めてしまい、私も声をかけたのですが、チームとしての協働はうまくいきませんでした。

学生の志向や悩みを
共有できる場があれば、
非常勤講師にも、
学生個別の指導が可能だと思います。

齊藤

塩瀬　そうした場合の改善方法を知るためにも、指導ノウハウの共有は重要です。例えば、グループワークでは課題の内容が重要で、1人でできてしまう課題にするとできる人に作業が偏るので、２人でなければできない課題にすることが大切になります。そうした工夫まで全校で共有したいものです。

少しずつでもティップスを積み上げ、
現場の先生方を支援する
指導のデータベースを築きたい
と考えています。

岡村

学校としての教育力向上策①

学科を超えた協働で、現場を体験し、意欲を高める

――学生の学習意欲に関しては、本調査で注目したい結果があります。進路選択の時期を学科別に見ると、「ゲーム・ＣＧ・コンピュータ・情報処理系」では高校２年生までに進路を決めた学生は約２割でしたが、「栄養・調理・製菓系」「美容・理容系」といった大学には「少ない」「ない」学科では、約４割が高校２年生までに進路を決めていました（図２）。

塩瀬　この結果を見ると、日常生活の中でその仕事に触れているかどうかが、学習意欲に大きな影響を与えていると考えられます。栄養・調理・製菓系や美容・理容系は、仕事の様子が日常生活の中で見えますが、情報技術系の仕事の様子は日常生活で目にすることはありません。学生は仕事の内容を想像して選んでいるわけで、その想像と実際との食い違いをなくすために、職業体験が重要だと考えます。

井本　パティシエ学科では、学生が企画・運営する「Café de YIC」を月２回オープンしています。ケーキや焼き菓子などの製造、販売、接客と、仕事を一通り経験する場です。２学年合同で行い、１年生にも早い時期から仕事としての製菓を経験させることで、将来を考えられるようにしています。

塩瀬　異学年合同とすることで、学生にとってよい協働の場にもなりますね。

井本　はい。２年生が１年生を指導するようにしていて、１年生が講師に質問してきても、まず先輩に聞くように指導しています。先輩から言われた方が、教師が言うよりも学生は動きます。

塩瀬　講師は何か指導するのですか。

井本　よほどのことがない限り、指示はしません。講師が何か言うと、それで２年生が動いてしまいます。悩むのも勉強の一つと捉えています。

岡村　職業体験は各学科で様々に設けており、大きなものではリアルウェディングがあります。国際ホテル・ブライダル学科の学生がプロデューサーとなり、美容学科がヘアメイクを担当、パティシエ学科がウェディングケーキを製作し、ＩＴ･ＷＥＢ系の学科が映像・音響・照明を担当します。

塩瀬　カフェやリアルウェディングのＰＲの担当としてデザイン科が加わると、さらに学びが深まりそうです。学科を超えた協働は、ある一定の規模を持つ学校の強みですね。

齊藤　学科を超えた協働がもっと広まるとよいと思います。仕事でウェブサイトを制作した美容院から、インスタグラムの更新やより見栄えのする撮影の仕方を相談されることがあります。

図2　学科・コース別　専門学校への進学を考え始めた時期

Q. 現在の学科を志望したのはいつごろですか。

■大学に「多い」学科・コース群　（%）

	全体	医療・リハビリ系	ゲーム・CG・コンピュータ・情報処理系	ビジネス・経営・事務・秘書系
N	9484	2432	1061	831
高校入学前	2.9	2.2	2.0	1.0
高校１年生の時	3.1	3.1	2.4	1.7
高校２年生の時	13.4	14.2	14.6	11.7
高校２年生までに進路決定	19.5	19.5	19.1	14.4
高校３年生の時	75.3	76.7	73.0	79.7
その他	3.5	2.4	6.3	4.4
無回答	1.7	1.4	1.6	1.5

■大学に「少ない」「ない」学科・コース群　（%）

	栄養・調理・製菓系	美容・理容系	ペット系	音楽・アニメ・芸術系
N	648	362	164	455
高校入学前	9.2	8.5	7.5	4.7
高校１年生の時	7.4	6.6	6.7	6.3
高校２年生の時	24.3	21.0	19.2	17.7
高校２年生までに進路決定	40.8	36.1	33.3	28.7
高校３年生の時	53.4	58.4	65.0	67.8
その他	2.5	3.6	1.7	1.9
無回答	3.2	2.0	0.0	1.6

出典／ベネッセ教育総合研究所（2017）「専門学校生の学習と生活に関する実態調査」

本校には、その両方を学べる学科があるので、美容学科の学生もウェブや写真の科目が学べればよいのにと思いました。

井本　パティスリーでも、ウェブサイトやインスタグラムでのＰＲが重要です。いいアイデアだと思います。

齊藤　地方では１人に求められる職能の幅がとても広いと思います。例えば、都市部では、ウェブ制作もデザインとコーディングを分業する場合が多いですが、地方では１人ですべて行います。

塩瀬　地元で就職する学生が多い専門学校では、地域のニーズをカリキュラムに反映することで、職業人としてある程度のスキルを持った状態で働き始められます。地域の産業構造に近い形でカリキュラムを設計できることが、専門学校の強みにもなるでしょう。

学校としての教育力向上策②

職業人として共通に必要な能力を見いだして育む

齊藤　私が調査結果を見て気になったのは、才能やセンスの不足を不安に感じている学生の多さです（**図３**）。学校で２～３年間学んだところで、その有無を判断できる職能レベルに達するわけがなく、単に授業についていけない理由として挙げているのだと思いました。そうすると、学生が、就職するまで諦めずに、楽しく学習ができるような授業をしたいと思うのです。

岡村　私は、高校生の段階で職業を決めるのは難しく、専門学校で学んでみて合わなければ、ほかの職業を考えればよいと思っています。多様な学科を持つ本校だからこそ、いろいろな学びや職業を見ることもできます。

塩瀬　それまでの学びが無駄になると思うと、進路変更をためらうものです。ただ、仕事をする上で必要とされる能力には共通のものがあり、違う職業に就いても活用できる学びがあります。それを見える化すれば、進路変更後の見通しが立ちやすくなり、進路変更のハードルが低くなるのではないかと思います。そのためには、卒業生の追跡調査が重要であり、就職後に専門学校で学んだ何が役立っているのかを調査することで、より仕事に役立つ能力を育成できるようになります。

学校全体で課題を整理し、
認識することが、
教育の質向上のスタートラインです。

塩瀬

岡村　介護福祉士が看護師になったり、看護師が社会福祉士になっていたりと、キャリアチェンジをしている卒業生もいますから、学生のキャリアのロールモデルになるよう、そうした方たちを紹介したいと考えています。そのためにも、各校の同窓会をグループ全体でまとめ、同じ業界内でのネットワークを構築しようとしています。

塩瀬　学習意欲や能力の違い、教育と運営のバランスを踏まえた上でカリキュラムを考えなければなりませんが、どの学科でも同じようなことで悩んでいるのも事実であり、それを共有して解決策を考えていくことができるはずです。課題をそのままにしていたら、結局、不利益を被るのは学生です。卒業後に役立つことを学び、社会で活躍してほしい。専門学校の教育の質を高めていくことは、社会的意義のあることであり、そのための方法を模索していっていただきたいと思います。

図３　学科・コース別　学びや進路に関する悩み

Q. 専門学校での学びや進路に関する悩みについてお聞きします。次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

（%）

	全体	医療・リハビリ系	ゲーム・CG・コンピュータ・情報処理系	ビジネス・経営・事務・秘書系	栄養・調理・製菓系	美容・理容系	ペット系	音楽・アニメ・芸術系
N	9484	2432	1061	831	648	362	164	455
就きたい職業・仕事と現在学んでいることが結びつかない	20.3	14.0	25.1	25.9	19.5	18.6	13.6	26.4
就きたい職業・仕事が明確になっていない	35.5	27.4	43.0	49.5	33.9	30.1	33.6	45.7
就きたい職業・仕事に必要な才能・センスの不足を感じる	57.6	56.1	67.5	58.4	66.0	53.2	57.6	75.7
就きたい職業・仕事のために学ばなければならない内容が難しい	63.6	73.0	69.3	56.3	60.8	58.4	64.0	54.9

注1）数値は「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の合計％。複数回答。　注2）「全体」より５ポイント以上高いものに色づけしている。
出典／ベネッセ教育総合研究所（2017）「専門学校生の学習と生活に関する実態調査」